ISSN 0911-7113 自動車工業 JAMAGAZINE 2019年5月号 2019年4月22日発行（毎月1回発行）

info DRIVE ジャマガジン

Jamagazine

Japan Automobile Manufacturers Association

日本自動車工業会 広報誌

JAMA vol.53
2019 [May] 5月号

特集

モータースポーツジャパン2019
東京モーターサイクルショー2019
日本自動車会館キッズエンジニア
オートモビルカウンシル2019

自動車博物館関連施設紹介シリーズ

マツダ／マツダミュージアム

祝 令和元年

JAMA

一般社団法人 日本自動車工業会

一般社団法人 日本自動車工業会　役員名簿 （平成31年4月8日現在）

会　　長	豊田　章男	トヨタ自動車株式会社	代表取締役社長	（非常勤）
副 会 長	○神子柴　寿昭	本田技研工業株式会社	取締役会長	（　〃　）
〃	西川　廣人	日産自動車株式会社	代表取締役社長　最高経営責任者	（　〃　）
〃	丸本　明	マツダ株式会社	代表取締役社長	（　〃　）
副会長・専務理事	永塚　誠一			（常勤）
常務理事	和迩　健二			（　〃　）
理事	細井　行	いすゞ自動車株式会社	取締役会長	（非常勤）
〃	片山　正則	〃	代表取締役社長	（　〃　）
〃	原山　保人	スズキ株式会社	代表取締役副会長	（　〃　）
〃	鈴木　俊宏	〃	代表取締役社長	（　〃　）
〃	吉永　泰之	株式会社SUBARU	取締役会長	（　〃　）
〃	中村　知美	〃	代表取締役社長	（　〃　）
〃	三井　正則	ダイハツ工業株式会社	代表取締役会長	（　〃　）
〃	奥平　総一郎	〃	代表取締役社長	（　〃　）
〃	小林　耕士	トヨタ自動車株式会社	代表取締役副社長	（　〃　）
〃	寺師　茂樹	〃	取締役・副社長	（　〃　）
〃	佐藤　康彦	〃	執行役員	（　〃　）
〃	坂本　秀行	日産自動車株式会社	取締役 副社長	（　〃　）
〃	川口　均	〃	専務執行役員 チーフサステナビリティオフィサー	（　〃　）
〃	中畔　邦雄	〃	専務執行役員	（　〃　）
〃	市橋　保彦	日野自動車株式会社	代表取締役会長	（　〃　）
〃	下　義生	〃	代表取締役社長	（　〃　）
〃	八郷　隆弘	本田技研工業株式会社	代表取締役社長	（　〃　）
〃	倉石　誠司	〃	代表取締役副社長	（　〃　）
〃	○尾高　和浩	〃	執行役員	（　〃　）
〃	小飼　雅道	マツダ株式会社	代表取締役会長	（　〃　）
〃	藤原　清志	〃	代表取締役副社長執行役員	（　〃　）
〃	安藤　剛史	三菱自動車工業株式会社	副社長執行役員	（　〃　）
〃	山下　光彦	〃	アドバイザー	（　〃　）
〃	松永　和夫	三菱ふそうトラック・バス株式会社	代表取締役会長	（　〃　）
〃	ハートムット・シック	〃	代表取締役社長	（　〃　）
〃	柳　弘之	ヤマハ発動機株式会社	代表取締役会長	（　〃　）
〃	日髙　祥博	〃	代表取締役社長 社長執行役員	（　〃　）
〃	ヨアキム・ローゼンバーグ	UDトラックス株式会社	代表取締役会長	（　〃　）
〃	酒巻　孝光	〃	代表取締役社長	（　〃　）
理事・事務局長	矢野　義博			（常勤）
監　　事	安田　政秀	トヨタ自動車株式会社	常勤監査役	（非常勤）
〃	吉田　正弘	本田技研工業株式会社	取締役監査等委員	（　〃　）
〃	杉山　雅洋	早稲田大学	名誉教授	（　〃　）

○印：新任

JAMAGAZINE 2019年 5月号

発行日　2019年4月22日
発行人　一般社団法人 日本自動車工業会
発行所　一般社団法人 日本自動車工業会
〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館
広報室　kouho2@mta.jama.or.jp

©禁無断転載：一般社団法人 日本自動車工業会

1 モータースポーツジャパン2019
2 東京モーターサイクルショー2019
3 日本自動車会館キッズエンジニア
4 オートモビルカウンシル2019
5 ジャパンオートモーティブAIチャレンジ
6 マツダ/マツダミュージアム

02 特集
モータースポーツジャパン2019
東京モーターサイクルショー2019

09 日本自動車会館キッズエンジニア

10 昭和から平成を振り返り、令和に向かう
オートモビルカウンシル2019

12 ジャパンオートモーティブAIチャレンジ

14 2018年度小型・軽トラック市場動向調査
2018年度普通トラック市場調査

16 自動車博物館関連施設紹介シリーズ
マツダ/マツダミュージアム

17 記者の窓
「私とクルマの四半世紀」
日刊自動車新聞社　福井 友則

OPEN FUTURE
TOKYO MOTOR SHOW 2019

●JAMAGAZINEは自工会WEBサイトからもご覧いただけます

www.jama.or.jp/lib/jamagazine/index.html

〈ホンダ〉
将来のレーシングドライバーを夢見て

特集

モータースポーツジャパン2019

（4月6、7日開催）

令和に向け、自動車の最新技術とトレンドの方向性

最新モデルやモータースポーツが牽引

今年2019年、平成から令和に元号も変わり、自動車業界は華やかでかつ重要な年になります。さまざまな自動車関連イベントが目白押しの中で「モータースポーツジャパン」「東京モーターサイクルショー」は最新技術と、これからのトレンドを示しています。そして、その先には秋開催の「東京モーターショー」が控えています。自動車は「100年に一度の変革期」といわれ、自動運転、電動化、シェアリングなど、自動車、そして関連産業は新たな飛躍を求められています。「モータースポーツジャパン」「東京モーターサイクルショー」に来場した多数の若者や家族連れの“笑顔”から、自動車やバイクが持つポテンシャルが見えてきます。

■期間中の来場者は10万人超え

都内有数の観光スポット、東京・お台場でモータースポーツの魅力を広くアピールする恒例イベント「モータースポーツジャパン2019フェスティバル・イン・お台場」が4月6、7日の2日間、東京都臨海副都心で行われました。春の暖かな日差しが降り注いだ両日、モータースポーツファンのみならず、お台場に買い物や観光に訪れた一般客も含め、期間中の来場者は10万人を超えました。イベントには国内自動車メーカー各社が参加。レーシングカーや市販車のデモ走行、子供向けのコクピット体験など様々なプログラムを行い、モータースポーツの魅力を見て、聞いて、体感してもらう活動に、メーカーの垣根を越えて取り組みました。

【トヨタ自動車】GAZOOレーシングで挑戦 新型「スープラ」走行

世界ラリー選手権に参戦する「ヤリスWRC」は、世界耐久選手権を戦う「TS050ハイブリッド」などを展示し、トヨタがGAZOOレーシングとして挑戦するモータースポーツの世界を紹介しました。

グラベル（悪路）仕様のヤリスWRCは華麗なデモ走行を披露。同乗体験にも登場し、来場者に世界レベルのパフォーマンスを感じてもらう機会を提供しました。

また、今春の発売を予定している新型「スープラ」をベースにしたレーシングカーのデモ走行

〈トヨタ〉
WECに参戦するTS050ハイブリッド。子供を対象にコクピット体験も

〈トヨタ〉
ヤリスWRC。グラベル（悪路）仕様で豪快な走りを披露

「クルマって楽しい」と思ってほしい 自工会と目指す方向は同じ

日本モータースポーツ推進機構・
日置和夫理事長

自動車メーカー各社の協力を得て、ここ東京・お台場でモータースポーツに対する理解促進活動を展開しているのがこのイベントです。モータースポーツファンはもとより、クルマに関心のない一般のお客様がモータースポーツを見て、聞いて、体感する場を提供することで、将来的にはサーキットに足を運んでもらえることを期待しています。

近年は出展各社が子供向けプログラムを数多く実施していることもあり、ファミリー層の来場が増えています。会場ではカートやバイクの体験会も行なっており、こうした経験を通じて『クルマって楽しい』と思ってほしいと感じています。それがクルマに関心を持つきっかけになり、将来的に業界に入ってもらうきっかけになるかもしれません。めざす方向は自工会と同じだと思っています。

今年は東京モーターショーの開催年です。日本発の自動車をどう発信するか、クルマって楽しいということを気楽に表現できるやり方が重要なのではないでしょうか。

我々には過去から紡いできたモータースポーツのアセットがあります。こうしたものを活用して幅広いお客様との接点を見い出すやり方もあるかもしれません。モータースポーツジャパンだけでなく東京モーターショーでも推進し、ともに自動車文化の醸成につなげていきたいと思います。

会場には東京モーターショーのポスターを掲出

〈日野〉
車高が高いレーシングトラック。コクピット体験は極めて貴重

〈日産〉
モータースポーツを身近に感じてもらうためタイヤ交換体験会も実施

も行いました。車両を横滑りさせて、その姿勢の美しさと技術の正確さを競う「D1グランプリ」に参戦するマシンで、リアタイヤから白煙を上げて疾走する姿を来場者に見せつけました。

トヨタブースでは来シーズンのスーパーGTに参戦する「SUPRA GT CONCEPT」を展示。隣接するレクサスブースに展示された「LC500（テストカー）」からバトンを受け継ぐスーパーGTマシンが揃う貴重な機会となりました。

【日産自動車】「リーフニスモRC」デモ走行 GT-Rのエンジンサウンドも轟く

「ニッサン インテリジェントモビリティ」を掲げる日産は、電気自動車（EV）「リーフ」をベースにしたレーシングカー「リーフニスモRC」のデモ走行を披露しました。同マシンはシャシーに搭載した二つの電動モーターで駆動。大容量リチウムイオンバッテリーやインバーターな

〈日産〉
フォーミュラE参戦車も展示。日系メーカーで唯一参戦

〈日産〉
リーフニスモRC。静かな加速を見せる電動マシンは次世代モータースポーツの魅力となるでしょう

〈ホンダ〉Legend of the HONDAではホンダモータースポーツの歴史を彩ったマシンを展示

〈ホンダ〉カーボンボディむき出しで疾走するNSX-コンセプトGT

どドライブトレインの構成部品は、市販車の技術を採用しています。「ヒューン」というモーター音とともに静かに加速していくマシンは新時代のレーシングカーそのもの。ブース内に展示した「フォーミュラE」参戦車とともに、EV時代のモータースポーツを紹介しました。

一方、スーパーGTスペシャルランでは「モチュールオーテックGT-R」が登場。GT500クラスからの引退を発表した本山哲さんがステアリングを握り、内燃機関ならではの迫力のエンジンサウンドを会場に轟かせました。

また、ブースでは「ノートeパワーニスモS」「リーフニスモ」を展示。日産のモータースポーツ活動を担うニッサン・モータースポーツ・インターナショナル(ニスモ)の技術が息づくスポーティな市販車を紹介しました。

【ホンダ】「NSX-コンセプトカーGT」デモ走行 歴代のF1マシンを展示

昨年のスーパーGTなどでシリーズチャンピオンを獲得したホンダは、カーボンボディむき出しのスーパーGT開発車輌「NSX-コンセプトGT」のデモ走行のほか「Legend of the HONDA」と題した特別展示などを実施しました。

特別展示では、ホンダのモータースポーツ活動の歴史を彩る二輪、四輪のマシンを持ち込み、二輪ではWGP60周年を記念してグランプリマシンを展示。1961年に高橋国光氏が優勝した「RC162」から最新のモトGPマシン「RC213V」まで6台のマシンを披露しました。

四輪では1965年に初優勝を飾った「RA272」から昨シーズンの「トロロッソ・ホンダSTR13」まで、4台の歴代F1マシンを展示しました。

ブースでも二輪、四輪、両方でモータースポーツ活動を行なうホンダならではの展示を行ないました。二輪では鈴鹿8時間耐久、全日本トライアル、全日本モトクロス、四輪ではスーパーフォーミュラ、スーパーGT、ワンメイク車両など、ホンダが挑戦するあらゆるカテゴリーの参戦マシンが一堂に会しました。

【スバル】WRCの歴史が蘇る 一般客乗せて同乗走行も

スバルモータースポーツの歴史を築いたラリーマシンがデモ走行を行いました。注目を集めたのは1998年のWRCに参戦した「インプレッサWRC98」です。スコットランドのレジェンドドライバー、故コリン・マクレー氏とともにあったスバルWRCの歴史が新井敏弘選手の手によって蘇りました。

全日本ラリー選手権に出場するチームARAIの「WRX STI」のデモ走行でもラリーならではの豪快な走りを披露しました。一般客を乗せた同乗走行では荒れた路面でもマシンを自在に操るラリーの醍醐味を感じてもらいました。

また、ブースではニュルブルクリンク24時間レースやスーパーGTに参戦するマシンを展示。監督やドライバーがトークショーを行ない、目前に迫ったレースに向けて意気込みを語りました。

〈マツダ〉人馬一体の走りを支えるロードスターのスカイアクティブシャシー

〈スバル〉ニュルブルクリンク24時間レースに参戦するマシンも登場

〈スバル〉1998年のWRCに参戦したインプレッサWRC98。往年の走りが蘇る

〈ダイハツ〉
1968年の第3回日本グランプリに出場しGP1クラスで優勝したマシン「P-5」

〈日野〉
「日野レンジャーダカールラリー2018参戦車」の走行。異名はリトルモンスター

【日野自動車】リトルモンスターの豪快な走り同乗走行、コックピット体験も

「日野レンジャーダカールラリー2018参戦車」を走らせました。ベース車両はその名の通り中型トラックで、「リトルモンスター」との異名を持つレーシングトラックです。デモ走行では迫力のエンジンサウンドを轟かせ、乗用車ベースのレーシングカーとは異なる豪快な走りを披露しました。

また、同乗走行、コクピット体験も実施。国内のレースシーンではお目にかかれないレーシングトラックの魅力を伝える機会となりました。

【ダイハツ工業】レストアした「P-5」を出展当時のドライバーも登場

従業員の有志によってレストアされた往年のレーシングカー「P-5」を出展しました。1968年の第3回日本グランプリに出場しGP1クラスで優勝したマシンです。会場では当時のドライバー武智勇三氏を迎え、トークショーが行われました。

また、サプライズでデモランが行われ、当時の貴重なサウンドを響かせました。

【マツダ】30周年の「ロードスター」を展示マツダ車を楽しむイベントも紹介

誕生30周年を迎えた「ロードスター」を紹介する展示を行いました。ドライバーが意のままに操れる人馬一体の走りを支えるスカイアクティブシャシーを公開。メカ好きなファンなどが食い入るように見つめていました。

また、マツダ車ユーザーがサーキット走行を楽しめる「マツダファン・サーキットトライアル」、運転技術を高める「マツダ・ドライビング・アカデミー」など、マツダ車のある生活を豊かなものにする各種イベントも紹介しました。

【三菱自動車】新型「デリカD：5」など展示4WD性能を体感する登坂同乗を実施

新型「デリカD：5」、新型「eK X（クロス）」、「エクリプスクロス」を展示しました。デリカD：5とeKクロスは発売間もないこともあり、多くの来場者の注目を集めました。

また、4WD性能が体感できる登坂同乗も実施。最大傾斜45度、100%勾配の急坂登坂、20度の傾斜を横切るキャンバー走行、高さ40センチメートルの凸凹路面走行など、三菱車の誇る悪路走破性や高いボディ剛性などが体感できる機会を提供しました。

【スズキ】「ジムニー」「スペーシアギア」を展示かつては世界ラリー選手権にも参戦

「ジムニー」「スペーシアギア」を展示しました。現在スズキは世界最高峰の二輪車レースであるモトGPに参戦していますが、かつては世界ラリー選手権にも参戦していました。今回のイベントでは会場を訪れたファンに、新型車の発売以来、好調な受注を続けるジムニー、内外装にアウトドア仕様を施したスペーシアギアを紹介しました。

〈スズキ〉
好調な受注が続く新型ジムニー、アウトドア仕様のスペーシアギアを展示

〈三菱〉
新型デリカD：5とeKクロスを展示。4WD性能が体感できる登坂同乗は人気を博していました

特集

東京モーターサイクルショー2019

（3月22~24日開催）

国内最大級の二輪車見本市 3日間で過去最高の約15万人が来場

国内最大級の二輪車見本市「東京モーターサイクルショー2019」が3月22~24日、東京都江東区の東京ビッグサイトで行われました。国内メーカーは川崎重工業、スズキ、ホンダ、ヤマハ発動機の4社が出展。海外メーカーも多数出展しました。会場にはリターンライダーと呼ばれる年配層や増加傾向にある女性ライダーだけでなく、小さな子供を連れたファミリー層も多く見られ、3日間の会期中、14万9524人（前回比1·8%増）が来場しました。出展各社は国内二輪車市場の活性化につなげようと展示ブースにも様々な工夫を凝らすなど、来場者にバイクの魅力、バイクのある豊かなライフスタイルを提案する様子が伺えました。

カワサキ

3つのエリア展開でバイクのあるライフスタイルを提案

カワサキブースでは3つのエリア展開で2019年モデルを中心とした最新モデルを紹介しました。ブランドアイコンゾーンではトップエンドモデル「Ninja H2 SX SE+」「Ninja ZX-10RR」「Ninja H2 CARBON」を展示。ブース中央には実際にまたがって乗車できる体感ゾーンを設けました。

今回、最も力を入れたのがモーターサイクルライフゾーンです。オートバイのあるライフスタイルを提案するもので、バイクとともにアパレル商品などを展示しました。バイクのファン層を増やしたいとの思いが込められています。

「VERSYS 1000SE」ではアドベンチャーなライフスタイルを提案しました。車両横に置いたのはゴルフのキャディバッグ。休日にバイクに乗るだけでなく、ゴルフ場にバイクで行くという提案です。担当者は「ゴルフ場まではワインディングロードもある。キャディバッグは郵送しゴルフ場までの道のりを楽しんではいかがですか」と話してくれました。

「W800 CAFE」はオシャレなユーザーがターゲットです。「休日はW800 CAFEに乗ってカフェでコーヒーを飲みにいく。多くの人生経験を積んだ懐の深い大人に向けて提案したい」と言います。

「Ninja ZX-6R」で想定したのは30代の女性です。平日はキャリアウーマンとして働き、「仕事が終わってからは夜の街にライディングに出かけるような格好いい女性をイメージしてもらいたい」として、ボディカラーはブラック、赤のヘルメットを提案しました。

オートバイのあるライフスタイルを提案

「Ninja ZX-6R」で想定したのは30代の格好いい女性

スズキ

ワイワイ、わくわく、バイクに乗ろう 実際に乗って、触れて

スズキのブースコンセプトは「ワイワイ、わくわく、バイクに乗ろう!」です。日本初公開となった新型「KATANA」だけでなく、スズキが挑戦する世界最高峰のバイクレース、モトGP参戦マシンにも乗車体験できるとあって、公開初日から大勢のファンが駆け付けました。

新型カタナは昨年10月に独で行われたインターモト（ケルンショー）で発表されました。今春から欧州で発売が始まり、日本でも今年中に発売される予定です。ブースでは1980年から始まるカタナの歴史や魅力を紹介するとともに、初代「GSX1100S KATANA」も展示。新旧KATANAが揃うというファン垂涎のイベントとなりました。実際にまたがって乗車できる車両も2台用意。朝から長蛇の列が切れることはなく、その高い人気ぶりを伺い知ることができました。

スズキが今回のイベントで注力したのは「バイクを身近に感じてもらうため実際に乗って、触れてもらうこと」（担当者）だと言います。モトGP参戦マシン「GSX-RR」が体験できるコーナーを設けたのもその一環です。レースが疑似体験できるもので、モータースポーツの凄さを体験できるようにしました。

ブースではモトGPマシンのテクノロジーを融合させたスポーツバイク「GSX-R1000R ABS」のニューグラフィックモデルをはじめ、最新の市販車両も多数展示。ロードスポーツからスポーツアドベンチャーツアラーなど、スズキブランドの魅力を訴求しました。

スズキの隠れた人気商品が東京・大阪のモーターサイクルショーで販売される「湯飲み」です。毎回、売り切れ必至の商品で今回も多くのファンが買い求めていました。

新型「KATANA」と初代「GSX1100S KATANA」を揃って展示

モトGPマシンを体験できるコーナー

ホンダ

バイクが好きだ！豊かなバイクライフを提案

ホンダブースでは各モデルの後方に設置した壁面で、カテゴリーごとの世界観を表現する演出を施しました。ブースコンセプトは「Honda Fun！バイクが好きだ」。担当者は「従来にない展示手法を試みました。モデルの世界観やバイクの楽しさを感じていただければ」と、その狙いを話します。

各カテゴリーのモデルがもたらす豊かなバイクライフの提案として、ホンダが演出したのは「スーパーカブC125」をはじめとするスモールFUNモデルから、ホンダ伝統の「CBシリーズ」やスポーツモデル「CBRシリーズ」などの世界観。

中でも「CBシリーズ」は今年節目の年。1959年発売の「ベンリィCB92スーパースポーツ」から60周年、1969年発売の「ドリームCB750FOUR」から50周年、1979年発売の「CB750F」から40周年を記念し、「ドリームCB750FOUR」を参考出品しました。

レースマシンを紹介するコーナーでは、ロードレースやモトクロス選手権に参戦するマシンの展示とともに、将来の電動バイクとしての可能性を探るために開発された「CRエレクトリック プロトタイプ」を初披露しました。電動バイクにとってより過酷なフィールドであるモトクロスを想定した車両で、ホンダモーターサイクルジャパンの加藤千明社長は「このマシンから得られる技術ノウハウを蓄積し、今後もオフロードのみならずオンロードも含め、スポーツ性能の研究を継続して行っていく」と述べています。

また、ホンダはビジネス電動バイクとして開発中の「ベンリィエレクトリック プロトタイプ」も世界初公開しました。

インスタ映えする展示

モトクロスタイプの電動三輪車「CRエレクトリック プロトタイプ」

ヤマハ

バイクに醍醐味を感じて純正アクセサリーを装着

ヤマハは「GO with YOU～風香る旅へ～」とのブースコンセプトのもと、バイクの醍醐味を感じてもらうための展示を行いました。「GO」には外に出よう、「with YOU」には相棒であるバイクやパートナーと一緒に、「風香る旅」には、バイクで大自然を五感で感じようという思いが込められています。

ブース内にテントを設置し、外装ラッピングを施したツーリングバージョンの「トリシティ」「セロー」とともにキャンプを提案したのは、まさにこの一環です。担当者は「仲間とツーリングに出かけ、こんな楽しみ方もあるよとイメージしやすいように提案した」と話します。ブースに置いた大半のモデルが純正アクセサリーを装着している点も同社ならではの取り組みです。「乗りやすさやツーリング性能を高めるアイテム、オシャレ、利便性を上げるアイテムなど、実際に装着している状態を見てもらい、触ってもらうことが、次のアクション（実際の購入）につながる」と見ています。

ヤマハブースで注目を集めたのが大型3輪バイク「NIKEN GT」や3月28日にマイナーチェンジして発売した「YZF-R25」などの最新モデルです。NIKENGTは「NIKEN」ベースに、大型ハイスクリーンやグリップウォーマー、センタースタンドなどを標準装備しツーリングでの快適性を高めたモデルとなっています。

YZF-R25は2014年の発売以来、20代を中心とした若年層に支持されているモデルです。今回のマイナーチェンジではモトGP参戦マシンをシンボルとする新デザインを採用。倒立式フロントサスペンションを装備するなど走行性能に磨きをかけたのが特徴です。ブースには改良モデルをいち早く見ようと多くのファンが集まりました。

バイクの醍醐味を感じてもらう展示

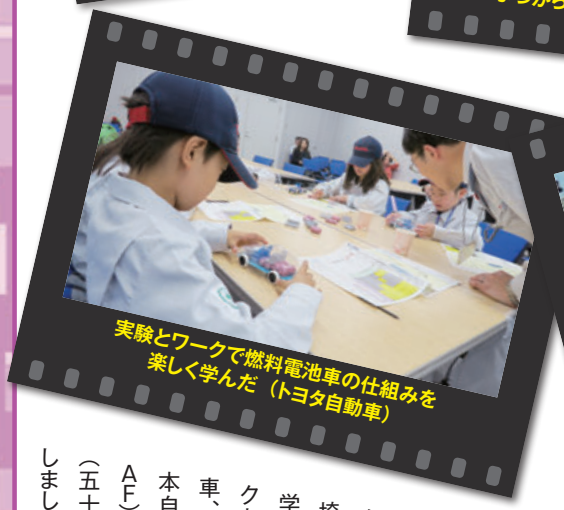
大型三輪バイク「NIKEN GT」

クルマのものづくりを体験 自動車メーカーなどが支援

日本自動車会館運営委員会は、小学生を対象とした学習イベント「日本自動車会館キッズエンジニア」を3月27日、東京都港区芝大門の同会館で開きました。この日は自動車メーカーや部品メーカー、自動車大学校、自動車関係団体が協力して8つの学習体験プログラムを用意。春休みを迎えた約300人の小学生たちが参加しました。会館に、体験を楽しむ子どもたちの明るい歓声が響きました。

整備大学校のお兄さんと一緒にタイヤ交換を体験（埼玉自動車大学校）

タブレットを使ったプログラミングでぶつからないクルマを作る（日産自動車）


実験とワークで燃料電池車の仕組みを楽しく学んだ（トヨタ自動車）

キッズバイク。実際にエンジンをかけてアクセルオン！（ヤマハ発動機）

■約300人の小学生らが体験

キッズエンジニアは、クルマを中心としたさまざまな科学技術やものづくりに興味を持ってもらうための体験型の学習イベントです。

運営委員会では、次代を担う子どもたちの育成に取り組む活動に賛同し、昨年初めて同会館を会場としたキッズエンジニアを開きました。

2回目となった今年は、カルソニックカンセイ、埼玉自動車大学校、ジェイテクト、トヨタ自動車、日産自動車、日本自動車連盟（JAF）、ヤマハ発動機（五十音順）が協力しました。各企業のエンジニアらを講師に構造や仕組みがじっくり学べる「教室型プログラム」（4種類）と、事前の申し込みなしで自由に参加できる「体験展示型プログラム」（4種類）の2タイプ8種類を企画しました。

■将来の人材育成に

教室型プログラムは、映像や資料を使いながら燃料電池車の構造やクルマの作動装置などを子どもたちにも分かりやすく解説。午前と午後に、それぞれ1時間半ずつ設けられた時間内で、組み立てや実験を行いました。自由参加のプログラムでは、自分だけのオリジナルミニカーやかざぐるまを作ったり、クルマのタイヤ交換などを体験しました。

主催した運営委員会は、今後もこのイベントを春休み恒例の催しとして定着させることにしています。子どもたちに、科学やものづくりの楽しさを知ってもらい、将来の自動車業界で活躍する人材に育ってくれることを期待しています。

昭和から平成を振り返り、令和に向かう

オートモビルカウンシル2019（4月5～7日開催）

メーカー、ブランドの垣根を超え 日本の自動車文化を育んできた

2016年にスタートしたイベントは今回で4回目を迎えた

独創性や先進性が際立った80～90年代のクルマが一堂に会した

メーカー合同ブースのテーマは「百花繚乱80's」

自動車メーカーは4社が出展

クラシックカーの展示・販売イベント「オートモビルカウンシル2019」が4月5～7日、幕張メッセ（千葉県美浜区）で開かれました。2016年にスタートした同イベントは今回で4回目。自動車メーカーは4社が出展しました。またトヨタとレクサス、日産、ホンダ、スバルは合同ブースを構え、「百花繚乱80'S」をテーマに企画展示を実施。日本メーカーが技術やスタイリングで独創性を打ち出した80年代の「ネオクラシックカー」を展示し、5月の改元を目前に昭和から平成の時代を駆け抜けた名車を紹介しました。

■80年代は先進性と独創性

「メーカーやブランドの垣根を越え、クルマを愛する全てのみなさまとともに、ヘリテージを尊び、人とクルマの未来を見すえ、日本の自動車文化を育んでいきたい」―。展示車両は日産「フェアレディZ」、ホンダ「シティ・カブリオレ」、スバル「アルシオーネ」「レガシィ ツーリングワゴン」、トヨタ「カリーナED」「MR2」、レクサス「LS400」の計7台。日本メーカーが欧米メーカーに追いついた80年代には、先進性や独創性では欧米車を抜き去るようなクルマが多く生み出されましたが、その時代を代表する名車が一堂に会しました。

《トヨタ》若者文化を象徴したクルマ 17年ぶりに「スープラ」復活

トヨタは、昨年に引き続き「トヨタ博物館」としてブースを構えました。1986年に登場した「スープラ」の横には、2002年の生産終了から17年ぶりに復活を果たした新型スープラを並べました。直列6気筒エンジンとフロントエンジンリアドライブ（FR）という基本を踏襲し、奇しくも同じホワイトのボディーカラーをまとった新旧2台のスープラは、まさに同イベントのテーマ「クラシック ミーツ モダン」を具現化していました。

合同企画に連携し「ソアラ」や「マークII」を展示し、80年代の「ハイソカー」「デートカー」といった当時の若者文化を象徴するクルマも紹介しました。

トヨタブースも80年代がテーマにハイソカー「マークII」を展示

新旧「スープラ」がそろい踏み

《日産》スポーツカーの二枚看板 カタログとミニカーで50年振り返る

日産ブースは、共に50周年の節目を迎えた「GT-R」と「フェ

アレディZ」がテーマ。4ドアセダンをベースとしたレース仕様に端を発するGT-Rと、グランツーリスモクーペのフェアレディZではそれぞれ性格は異なるものの、いずれも日産におけるスポーツカーの二枚看板として知られています。ブースでは、それぞれの初期モデルである「スカイライン2000GT-R」と「フェアレディ240Z-L」、そして2013年9月に独ニュルブルクリンクサーキット北コースで当時の量産車として世界最速の周回タイムを記録した「GT-R ニスモ N-アタックパッケージ」の3台を展示。ブース内のショーケース内には歴代カタログとミニカーを展示して、50年の歴史を伝えました。

《ホンダ》継承される「M・M思想」初代「シティ」を展示

ホンダは同社の設計思想である「M・M思想」を紹介。M・Mとはマン マキシマム・メカ ミニマムの略で「人のためのスペースは最大に、メカニズムは最小に」を意味しています。ブースではこの思想を具現化した1981年発売の初代「シティ」を展示。シティに搭載できるトランクバイク「モトコンポ」や携帯発電機「ジェンタEM400」も紹介し、80年代前半のホンダの事業の広がりを俯瞰できる内容としていました。また、最新モデル「N-VAN」も展示し、M・M思想が今も引き継がれている点を強調しました。

《マツダ》「ロードスター」一色 30年の物語を表現

マツダブースは、30周年を迎えた2シーターオープンスポーツ「ロードスター」一色でした。専用色「レーシングオレンジ」を採用した30周年記念車を日本初披露し、多くのロードスターファンの注目を集めました。プレスカンファレンスに登壇したデザイン・ブランドスタイル担当の前田育男常務執行役員は「30周年を迎えたロードスターは生産も100万台を超えた。われわれのモノづくりの根底となる『人馬一体』をもっとも分かりやすく体現し、マツダブランドを象徴するクルマ」と紹介。プロトタイプから、初代、2代目、3代目とそれぞれのモデルを展示して30年の〝物語〟を表現しました。

日産ブースは50周年を迎えた「フェアレディZ」と「GT-R」がテーマ

歴代のカタログやミニカーで50年の歴史を振り返った

ホンダのM·M思想を具現化した「シティ」

4分の1スケールの精巧なモックアップモデルが注目を集めた

マツダは「ロードスター」の30周年記念車を初披露

ブースもロードスター一色だった

ジャパンオートモーティブAIチャレンジ
自動車技術会主催（3月23、24日開催）

AI、ソフトウエア開発に向け若い技術者を発掘 東大「MTLLAB」が優勝・自工会会長賞を受賞

ソフトウエアや人工知能（AI）を自動車に実装する力を試す大会「ジャパンオートモーティブAIチャレンジ」が3月23、24日、東京大学柏キャンパス（千葉県柏市）で開催されました。自動運転の開発が加速している昨今ですが、重要な技術となるAIやソフトウエアの技術者は不足しているのが現状です。大会を通じて若い技術者を発掘し、一人でも多くにその力を自動車業界で発揮してもらおうと自動車技術会が始めた初の試みです。日本自動車工業会も後援しました。

停止できるかどうか、息を呑んで見守る観客達

参加者はトライアンドエラーを繰り返して完走を目指しました

■精度と完成度で競う

同大会は、シナリオ完走部門と制御精度部門の2部門で構成します。車両にはヤマハモータープロダクツの自動運転プラットフォーム搭載電動小型低速車両を使用しました。競技前の練習時間や競技中にウェイポイント（地点情報）の取得や設定を最適化し、精度や完成度の高さで勝敗を決めます。

■シナリオ完走部門

シナリオ完走部門では、コース内に用意された横断歩道に立つ歩行者、前方の駐車車両、信号の三つのセクションを用意しました。それぞれを認識した上で、自動停止、自動発進し、コースを所定時間以内に完走できればクリアとなります。

■制御精度部門

これに対して制御精度部門は、赤信号を認識し、停止線までの位置精度を競います。停止線と左前輪タイヤ中心線の距離を測定。1チーム2回までトライし、距離の近さで順位を決めました。

経済産業省が先に実施した画像認識の精度を競う大会で優秀な成績を残したITスキルが高い学生が出場しましたが、結果的には自動運転の難しさを感じさせる大会になったといえます。当初は「シナリオ完走部門」を初日、「制御精度部門」を2日目に実施する予定でしたが、初日に完走するチームが現れなかったため、延長戦としてシナリオ完走部門は2日目まで続きました。

■信号認識に苦戦

特に苦戦したのが信号の認識のようです。自動運転車は画像認識で信号の赤色と青色を検知した上で、ブレーキを制御します。そもそも色の認識も難しいですが、認識した後に走行制御が機能しないことも目立ちました。葛巻清吾大会委員長は「ITと自動車の技術、それらを統合する技術があって初めて自動運転は実現する」とし、参加した学生達は「実車となると難しさがまったく異なってくる」と話していました。

シナリオ完走部門で唯一完走したMTLLAB

■優勝の「MTLLAB」に自工会会長賞

2日間にわたる競技の結果、いずれの部門も東京大学大学院情報理工学系研究科の3人で構成する「MTLLAB」（エムティーエルラボ）が優勝しました。制御精度部門では、日本自動車工業会長賞が贈られました。MTLLABのメンバーは、「さらに技術を高めるために活用したい」と話します。

■認識や制御の成功に感激も

AI技術を競う今大会は、スピード感やエンジン音のある「学生フォーミュラ」と比べて盛り上がりにかけるように思う人もいるかもしれません。しかし、信号を認識できるか否か、停止線にどこまで近づけるか、認識や制御に成功した瞬間の興奮はAIチャレンジならではのものがあります。今後は観客への見せ方を工夫し、エンターテイメント性を高めていくことも検討しているようです。

■若いエンジニアの挑戦の場に

また、今回の出場チームは4チームでしたが、自動車技術会は将来的には40チームほどが出場する大規模な大会にしていく考えとのことです。「学生フォーミュラ」の自動運転部門として組み込むことも検討案の一つになっているようです。競技を観戦した自動車技術会の坂本秀行会長は「この大会が若いエンジニアのチャレンジの場として成長し、人材育成につながっていくと確信している」と感想を述べました。

自動車メーカーなどは自動運転の開発車両などを展示

競技終了後には、自動車メーカーなどのAIのエキスパートが登壇し、パネルディスカッションを実施

2018年度小型・軽トラック市場動向調査
2018年度普通トラック市場動向調査

小型・軽トラック市場動向調査について

自工会は、2018年度に実施した『小型・軽トラック市場動向調査』の結果をまとめました。

この調査は、小型・軽トラックユーザーの保有・購入・使用実態などを時系列的に捉え市場構造の変化を把握するためにアンケートを隔年で実施しているものであり、今回は以下の点の把握も行ないました。

(1) 環境意識と次世代環境車
(2) 安全意識と先進安全技術
(3) 小口配送の現状と課題
(4) 運転手不足の現状と課題
(5) 農家におけるトラック・バン

調査結果の主な特徴は以下のとおりです。

保有状況と変化の背景

●小型・軽トラック・バン全体の保有台数は減少傾向が継続するも、下がり幅が縮小。

車種別にみると、小型・軽トラック及び軽ボンバンの減少傾向は継続。小型バンは2015年以降ほぼ横ばい、軽キャブバンは伸長傾向が継続。

●最近1~2年間のトラック・バン保有台数は、運輸業以外、運輸業ともに「保有増」事業所が「保有減」事業所を上回る。

需要構造の実態

●小型・軽トラック・バン全体の需要台数は、保有期間短期化の動きも見られ、リーマン・ショック前の2008年、消費税率引き上げ時の2014年と同水準。2015年以降、小型トラック・バンは横ばい、軽トラック・バンは増加。

使用実態

●使用用途では小型バン、軽トラックで「最終消費者への配達・集荷」が低下。

●使用用途の変化に伴い、小型バンでは短距離化、往復型運行形態が上昇。

一方、軽トラックでは往復型運行形態が低下。

今後の購入・保有意向

●次期買い替え意向車は同タイプ・同クラス歩留まり意向率が高い傾向に変化はない。

●小型に比べ、軽は歩留まり意向率がやや低い。

●今後1~2年間の保有増減意向をみると、運輸業以外ではほとんどの事業所で変わらない見通し。

運輸業では約2割が増加意向、東京オリンピック閉幕後は約1割が減少意向。

●消費税率引き上げは、4割強の事業所に影響。影響のある事業所のうち4割強で購入時期前倒しの意向あり。

環境意識と次世代環境車

●次世代環境車の中では、「ハイブリッド車」に対する購入意向が最も高い中、小型キャブバンでは「電気自動車」の購入意向が上昇。

安全意識と先進安全技術

●各先進安全技術の有償装着意向は運輸業以外では3割超、運輸業では5割超。コスト負担を考慮しなければ、5割以上が自動運転技術へ期待。

小口配送の現状と課題

●配送料値上げ後も運輸業以外では外注化が進行。委託荷増に対応した運輸業における輸送効率化推進が課題。

運転手不足の現状と課題

●運輸業では運転手不足困窮度が深刻化。運転手採用は進んでおらず、給与水準の引き上げや、高齢者や女性運転手に配慮した働き方(勤務時間や業務分担など)改革の推進が課題。

農家におけるトラック・バン

●3割強が規模縮小・廃業予定。うち約3割が保有減もしくは保有中止。

報告書は一般向けに配布するとともに、当会ホームページにも掲載します。

普通トラック市場動向調査について

自工会は、2018年度に実施した『普通トラック市場動向調査』の結果をまとめました。

この調査は、普通トラックの保有・購入・使用実態、輸送ニーズの変化と対応や、物流を取巻く市場環境の変化を時系列的に捉え、隔年でアンケートを実施しているものです。

今回はユーザー・荷主双方の視点により実施し、また以下の把握も併せて行いました。

(1)ドライバー不足に関する意識・意向
(2)自動走行・隊列走行へのユーザー・荷主の期待と不安
(3)安全に対する意識
(4)運輸業者から荷主への要望と対応

調査結果の主な特徴は以下のとおりです。

経営状況

2018年度は経営状況の好転が進み、運輸業・自家用では稼働率上昇。

一方、荷主では今後の見通し悪化懸念等、不安材料も抱える。

需要動向

国内全体の輸送総量の減少傾向に歯止め。運輸業では大規模事業所、経営が好調な事業所での購入意向は高い。

ドライバー不足に関する意識・意向

ドライバー不足が進行し、特に大型免許保有者の不足が顕著という厳しい状況下だが、ドライバー確保に向けて、労働時間・待遇面等改善の取り組みは強化されている。

自動走行・隊列走行へのユーザー・荷主の期待と不安

期待する点として、運輸業ではドライバー不足の解消、事故の減少が多く挙がる。

一方、運輸業・自家用・荷主いずれも、事故時等の責任所在の明確化が共通の課題。

安全に対する意識

ドライブレコーダーの使用率が上昇し、今後の設置意向も各種サポート機器の中で最も高い。

運輸業では乗務前の点検・確認を重視し、アルコール・インターロックの需要も高い。自家用では、各種機器のサポートによる安全対策が増加。

運輸業者から荷主への要望と対応

運輸業者からは、荷待ち時間削減をはじめとする時間面での要望が強まっている一方、荷主側の対応は追いつかず、厳しい状況。

報告書は一般向けに配布するとともに、当会ホームページにも掲載します。

CAR Manufacturer
自動車博物館関連施設 紹介シリーズ

エントランス

技術展示

未来展示

マツダ／広島本社敷地内にある見学施設「マツダミュージアム」

館内案内の概要

1.エントランスホール
最新のクルマの展示やイベントなど、楽しい企画で皆さまをお迎えします。

2.歴史展示
1920年代からのマツダの歴史をヒストリックカーの展示とともに紹介します。今日に至るマツダの歴史をたどってみましょう。

3.RE展示
マツダの誇るロータリーエンジンの技術について紹介します。ル・マン優勝のレーシングカーも展示しています。

4.技術展示
クルマづくりのプロセスを紹介しています。ここでは、CX-5がどのような過程を経てつくられているのかを解説します。

5.U1組立ライン
目の前で次々とクルマが組み立てられていく迫力のある様子をじっくりご覧ください。展望デッキからは、マツダ専用の港が望めます。

6.未来展示
マツダの環境問題に対する考え方や、CO2排出量削減目標の実現などに向けた取り組みについて紹介します。

7.マツダミュージアムショップ
マツダのオリジナルグッズを販売しています。

マツダミュージアムの見学は完全予約制です。予約はインターネットまたはお電話にて承ります。
※工場の見学コースについては、会社都合によりご見学頂けない場合がございます。予めご了承ください。

見学のご予約

インターネットからご予約の場合

- ご予約をされる方は「予約を開始する」をクリックしてください。
- ご予約の確認・変更・取消をされる方はご予約完了時のご予約IDとパスワードが必要となります。

https://www.mazda.com/ja/about/museum/
QRコードよりご覧になれます。

電話からのご予約の場合
082-252-5050

お知らせ
- 2019年6月の見学について6月17日(月)～28日(金)の予約受付は、5月15日(水)〈予定〉から開始いたします。
- 2019年4月27日(土)～5月6日(月)12:45まで、会社休日のため、閉館いたします。

アクセス

マツダミュージアムまでのアクセスについてご案内いたします

Mazda Museum　マツダミュージアムは広島本社敷地内にございます

住所:〒730-8670　広島県安芸郡府中町新地3-1
3-1 Shinchi,Fuchu-cho,Aki-gun,Hiroshima 730-8670
電話:代表(082)252-5050

※駐車場のスペースに限りがありますので、個人のお客様はできる限り公共交通機関でお越しください。

公共交通機関や徒歩等でお越しの場合　本社正門へお越しください
お客様貸切バスでお越しの場合　宇品東正門より入門してお越しください

携帯電話・スマートフォンでQRコードを読み取ると、詳細な地図をご覧いただけます。

日刊自動車新聞社
福井（ふくい） 友則（ともの り）

私とクルマの四半世紀

1995年秋、高校生だった私は大阪の自宅から千葉の幕張メッセに向かっていた。第31回東京モーターショーを見るためだ。大学受験を控え、運転免許証も持っていないのに、生意気にもショー会場で未来の愛車を見つけてやろうと考えていた。会場ではホンダ「SSM」やマツダ「RX-01」など後に市販されたスポーツカーが多数展示されていたし、世界初の量産ハイブリッド車であるトヨタ自動車「プリウス」のコンセプトカーが初お目見えしたのもこの年のショーだった。

アルバイト代を貯めて最初に買った“愛車”は中古の小さなスポーツカーだった。室内は狭いし、荷物も載らないし、古いクルマだったのでよく壊れた。それでも小さくて軽いボディーは自分の手足が延長したかのように意のままに動き、近所のコンビニに行く距離でも運転していて楽しかった。

当時は目的地も決めずフラっと一人でドライブによく出かけた。初めての道でもカーナビが最短で目的地へと導いてくれる今と違い、紙地図しかなかった時代はそれなりに面倒もあったが、迷いつつも初めての道を走る高揚感を楽しむことができた。数年前の話しだが、海外で利用したレンタカーにカーナビが装備されていなかった。最初は戸惑ったが、マップアプリを頼りに目的地を目指す行為はちょっとした“冒険”で、久しぶりにドキドキを堪能できた。

初めて東京モーターショーを訪れてから四半世紀が経ったが、クルマとクルマを取り巻く環境は当時から大きく変わった。自動運転やシェアリングサービスが注目される今では、マイカーやドライブはもはや“死語”になりつつある。それでも「昔が良かった」というノスタルジーは不思議と感じていない。

少し話が脱線するが、祖父の影響で興味を持つようになったカメラは、この四半世紀でクルマ以上に大きく変化した。ご承知のようにフィルムからデジタルへと記録媒体が変わり、インスタグラムといったSNSの普及で写真の楽しみ方そのものも変わった。誰でも上手に撮影できるようになり、簡単に写真を共有できるようになったが、フィルムはデジタルで表現できない“味”があったし、古いカメラは露出や絞りをマニュアルで操作する楽しみがあった。なので、今はデジタルカメラに古いレンズを装着し、マニュアル撮影してSNSに投稿する、という折衷案でカメラライフを楽しんでいる。

CASEやMaaSは、交通事故の減少や運転手不足の解消、高齢者など交通弱者の助けといった様々なメリットをもたらしてくれるはずだ。同時に、技術の進歩はクルマの楽しさを何一つ奪わない、と私は信じて疑わない。新時代の幕開けとなる「令和」最初の東京モーターショーが、技術の進歩とクルマの新たな魅力を示すショーになると期待しつつ、記者としてはそのワクワク感をしっかりと皆さんにお伝えしていきたいと思う。

日本自動車工業会が徳島県小松島消防本部と鹿児島県姶良消防本部に「高規格救急自動車」寄贈

自工会は昭和44年から社会貢献の一環で毎年、救急自動車の寄贈事業を実施しています。平成30年度は徳島県小松島消防本部と、鹿児島県姶良消防本部に、それぞれ高規格救急自動車1台を寄贈しました。近年、火災、交通事故、自然災害など、地域の救援活動は複雑、多様化しています。このため、自工会としては高規格救急自動車の寄贈を通し、地域の方々の生活支援を目指しています。

高規格救急自動車受納式

小松島消防本部に高規格救急車1台

日本自動車工業会

日本自動車工業会は、小松島市消防本部に高規格救急車1台（約1千万円相当）を贈った。

小松島市役所で受納式があり、工業会の矢野義博理事・事務局長＝写真左＝が「火災、自然災害など消防業務は複雑、多様化している。地域のために役立ててほしい」とあいさつし、浜田保徳市長に目録を渡した。

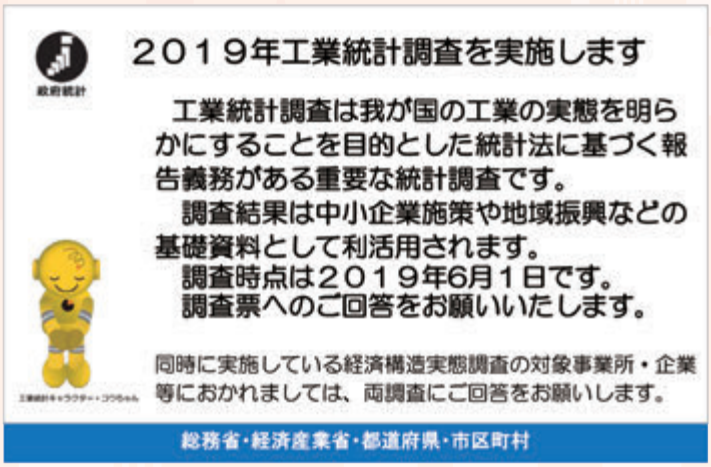
高規格車は、救急救命士が同乗して車内で医療行為を行える。市消防本部の高規格車2台のうち1台が老朽化したため、工業会の寄贈事業に応募して選ばれた。（高田麻衣）

▲（徳島新聞）

◆高規格救急車の寄贈式　姶良市消防本部で19日あり、日本自動車工業会が、1台（車両本体価格約1100万円）を贈った。同会総務統括部の魚住宏調査役は「社会貢献の一環で贈っている。活用してほしい」と話した。市消防本部の救急車は6台になる。

▲（南日本新聞）

Topics



2019年工業統計調査を実施します

工業統計調査は我が国の工業の実態を明らかにすることを目的とした統計法に基づく報告義務がある重要な統計調査です。

調査結果は中小企業施策や地域振興などの基礎資料として利活用されます。

調査時点は2019年6月1日です。

調査票へのご回答をお願いいたします。

同時に実施している経済構造実態調査の対象事業所・企業等におかれましては、両調査にご回答をお願いします。

総務省・経済産業省・都道府県・市区町村

Japan Automobile Manufacturers Association
vol.53　2019
日本自動車工業会「JAMAGAZINE5月号」2019年4月22日発行（毎月1回発行）　発行所：一般社団法人 日本自動車工業会
発行人：一般社団法人 日本自動車工業会　広報室　kouho2@mta.jama.or.jp　〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館
自工会インターネットホームページ「Info DRIVE」URL http://www.jama.or.jp/